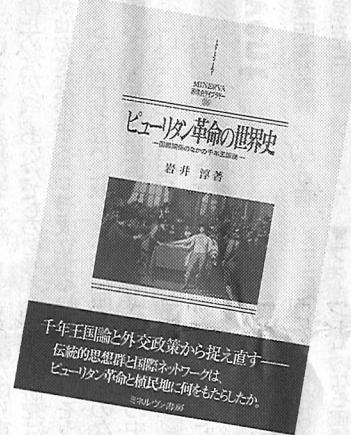


一国主義的・近代主義的な ピューリタン革命解釈を乗り越える

日本におけるピューリタン革命研究を先導し続ける著者の、総決算ともいえる著作

仲丸英起



岩井淳著
►ピューリタン革命の世界史
国際関係のなかの千年王国論
3・31刊 A5判360頁 本体6500円
ミネルヴァ書房

「ヒューリタン革命」といふ語は、その名称にヴァリエーションはあるても世界史のことは世界の歴史におけるこの事件の重要性が、一般的に認められているといつてよいだろう。にもかかわらず、この語によつて指示される17世紀中葉の一連の出来事は、新興ブルジョワジーが国王・貴族を打倒して封建社会から資本主義社会へ移行したといつてよい。さもなければピューリタンの思想に現代における民主主義の源流を見出そうとするホイック主義的なイメージとして流布している感が強い。こうした観点は一見すると理解しやすいものであるが、地域ごとの発展段階論に立つ「世界史の基本法則」の有効性が失われて久しい今日においては、むしろその世界史上における意義を見失にくさでしまつてゐる。こうした国主的・近代主義的な解釈は、歐米では1960・70年代には既に批判に晒されるようになつてゐたが、長らく戦後になってから、その残滓の払拭は、依然として困難な課題のまゝに留まつてゐる。

本書はこうした状況を打破すべく精力的な研究活動を続け、日本におけるピューリタン革命研究を先導し続ける著者による、待望久しかった本格的な学術書である。序章と終章を除き、既発表論文に加筆修正を加えた論考から集成されているが、総花式に並置されているわけではなく、以下の二つの軸を中心に再構成されている。第一の軸は近代主義を批判すべく打ち出された終論・千年王国論の視座であり、これにもとづき近代の民主主義・資本主義に直結しない近世独自の宗教思想の解明が目指される。第二の軸はイングランド一国史觀を批判すべく打ち出された国際関係の視座であり、国家といふ枠組みを越えて活動をしていたピューリターカたちの紐帶から革命の再検討が行われることになる。より具体的な課題としては、国際関係が革命における千年王国論の意義、国王処刑後の独立派の変容という3点が、第一～三部として括られた各論考の中で探察されることになる。

ショント」と呼ばれる人々の出現を促し、彼らと聖職者や新興貿易商人が結びついた人的なピューリタン・ネットワークが、オランダやニューイングランドにまで拡大した状況が明らかにされる。第Ⅱ部では、主要な独立派聖職者がその思想的基盤を千年王国論においており、それは王派を打倒し国教会体制の基盤を振り崩す「革命の思想」であつたこと、ただしニューイングランドにおいては住民の同化や支配に用いられる「帝国の思想」として機能したと指摘される。第Ⅲ部においては、1649年以降の安定した秩序が求められる状況下で、「革命の思想」たる千年王国論はその有効性を失い、独立派聖職者の多くは現実的な対応を迫られて保守化し、急進的な思想を堅持しようとすれば政権と対峙せざるをえなくなつていった状況が示され、こうした思想的変容は宗教より國益を優先するクロムウェルの外交政策にも根底していたことが明らかにされる。

や資本主義などに異感を抱く。千百年國論が革命的思想的推進力となり、またその影響はイングランド一国で完結するものではなく、國際的な相互關係を抜きにしては語りえないところが、かなりの説得力を持つて実証されている。その点で、一國主義的・近代主義的なビューリタン革命解釈を乗り越えようという著者の意図はある程度まで果たされているといえるだろう。前述したように革命に対する旧來のイメージが根強い日本において、その解毒剤としての本書の役割は大きい。